

生活行動における自己および他者の許容格差と人間関係

著者名(日)	内田 直子
雑誌名	大妻女子大学家政系研究紀要
巻	52
ページ	1-12
発行年	2016-03-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006336/



生活行動における自己および他者の 許容格差と人間関係

内田直子
大妻女子大学家政学部被服学科

A Tolerance Difference and Human Relations between Oneself and Others for Living Behavior

Naoko Uchida

Key Words: 公共の場 (public places), 生活行動 (living behavior), 許容 (tolerance), 人間関係 (human relations)

要旨

公共の場における行動について、自分が当事者として実行する場合、他人がそれを実行する場合とは感じ方が違うのかどうか、また、さらに自分が着用した服装の種類によって、他者の誰までに見られてもよいかの許容度合いについて検討した。その結果、行動を「許せる」「許せない」の視点からみると、自分に利害が及ばないものは許せる傾向がある。さらに、服装を見られてもよいかどうかの人間関係においては、人間関係の親密度、相手への思い入れ、性別による部分に関わっていることが認められた。

1. 緒言

現代の公共の場などにおいて、なぜ人前でこのような行為をするのか、または、このような行動は恥ずかしいのですものではないなど、様々な生活行動のマナー問題が今日取り沙汰されている。

本研究調査開始前の 2000 年には、電車内・駅で化粧をすることは見苦しいこととして、なぜこのような行為がなされるか脳科学の立場からの研究¹⁾が話題になったことがある。また、2005 年にクールビズが導入されたが、それ以前は、ワイシャツは「下着」と考え、背広を脱いでいれば、それはマナー違反と考える人がいた。これらのことから、「どうしてもこれは、公の場では許せない」という行動は、時代と共に変化しつつ、その中で生活しているのが現状である。

そこで、このような状況を踏まえ、時代変化とともに公の場でのいくつかの行動について、本人が当

事者として実行する場合と、他人がそれを実行する場合とは、どのように感じ方が違うか、その行動を「許せる」「許せない」という視点から検討した。この時、行動内容を「生活全般」(＝生活行動)に関するものと、「衣生活」(＝衣生活行動)に関するものを設定した。さらに、「生活全般」の一部と「衣生活」に関して、自己の行為の許容範囲はどのような他者まで「見られてよい」または「見られにくい」なのか、人間関係についても検討した。

なお、人間の許容度に関する研究として、環境行動研究から公共空間における振る舞いの指摘²⁾や、公衆場面での化粧行動からの研究³⁾、物の共有使用の許容度と人間関係の研究⁴⁾などがあるが、本研究は、生活行動全般と服装に関する許容度と併せて人間関係を含めて検討したものであり、このような視点の研究は著者の知る限り見当たらない。

2. 研究方法

2-1 行動の質問項目とその評価方法

表 1 に示すように、「生活行動」の内容として、公共ですることにメディアで問題が取り沙汰されることのある項目 (01)～(08) の 8 つを、次に「衣生活行動」の内容として、無難な日常的な服装とは異なる視点から (09)～(16) の 8 つを設定した。

評価方法は、「自分がする行為」と「他人がする行為」に分け、それが「許せない」の度合いの高いものから (－3) (－2) (－1)、中央は「どちらでもない」(0)、「許せる」の度合いの低いものから (+1) (+2) (+3) と 7 段階尺度で評価してもらった。

表 1 行動に関する調査質問事項

【生活行動】

- 01 公共の場で化粧をする
- 02 公共の場で携帯電話をかける
- 03 公共の場で仲良しの男性といちゃいちゃする
- 04 公共の場で仲良しの男性と手をつなぐ
- 05 公共の場で仲良しの男性と抱き合う
- 06 公共の場で友人と声を上げて話に盛り上がる
- 07 授業中、友人とおしゃべりする
- 08 授業中、寝ている

【衣生活行動】

- 09 露出度の多い服を着ている
- 10 ダサイと思う服を着ている
- 11 過激と思う服を着ている
- 12 安物っぽい服を着ている
- 13 高級感のある服を着ている
- 14 時代遅れの服を着ている
- 15 時代の先端を行くような服を着ている
- 16 エレガントな服を着ている

2-2 他者の許容範囲とその評価方法

「生活行動」の(01)と「衣生活行動」の(09)～(16)の計9項目に関して、表2に示す本人(=評価者)と関わりのあると思われる17種類の他者を挙げた。この17種類の他者に対して見られても

表 2 許容範囲の対象他者

(♥ = 女性 ♠ = 男性)

- ① 仲の良い女の友達♥
- ② あまり親しくない女の友達♥
- ③ 仲の良い男の友達 (恋人ではなく) ♠
- ④ あまり親しくない男の友達♠
- ⑤ 憧れの男の人 (恋人含む) ♠
- ⑥ 知っている女の先輩♥
- ⑦ 知っている男の先輩♠
- ⑧ 知っている女の後輩♥
- ⑨ 知っている男の後輩♠
- ⑩ 全員のアカの他人の女性♥
- ⑪ 全員のアカの他人の男性♠
- ⑫ 学校の担任・ゼミの女の先生♥
- ⑬ 学校の担任・ゼミの男の先生♠
- ⑭ アルバイトや職場の女上司♥
- ⑮ アルバイトや職場の男上司♠
- ⑯ 母親♥
- ⑰ 父親♠

よいかどうかを、「見られたくない」の度合いの高いものから(−3)(−2)(−1)、中央は「どちらでもない」(0)、「見られてよい」の度合いの低いものから(+1)(+2)(+3)と7段階尺度で評価してもらった。

2-3 評価対象者と評価時期

評価対象者は都内の女子大学生で、2003年6月に100名、2004年6月に83名、2012年7月に201名に実施した。なお、本稿の年別比較の時、2003年と2004年を一括した計183名を一つとし、表記上2003年として扱うこととする。

3. 結果と考察

3-1 生活行動における許容度

3-1-1 「自己」および「他者」別における年比較

図1の「自分がする行為」の2003年と2012年を比較すると、両年とも「許せる」側に「04 公共の場で仲良しの男性と手をつなぐ」「08 授業中、寝ている」があり、その他は「許せない」側にある。しかし、「01 公共の場で化粧をする」と「02 公共の場で携帯電話をかける」の評価は、2003年より2012年は「許せない」側に評価が移行し、両者間に有意な差がみられた。

図2の「他人がする行為」の2003年と2012年の比較では、「04 公共の場で仲良しの男性と手をつなぐ」「08 授業中、寝ている」は、許せる行為であり、年別にほとんど変化がないのに対し、「03 公共の場で仲良しの男性といちゃいちゃする」「05 公共の場で仲良しの男性と抱き合う」「06 公共の場で友人と声を上げて話に盛り上がる」「07 授業中、友人とおしゃべりする」は、「許せない」度合いが年別で有意な差があり、「許せない」度合いが以前より緩和されていることがみられる。

3-1-2 年別における「自己」および「他者」の比較

図3の2003年においては、「自分がする行為」と「他人がする行為」の許容度は、大きくは同じ傾向にあるが、両者に有意差のある「自分がする行為」より「他人がする行為」を許せるものは、「01 公共の場で化粧をする」「08 授業中、寝ている」で、その逆に「自分がする行為」より「他人がする行為」が許せないものは、「06 友人と声を上げて話に盛り上がる」「07 授業中、友人とおしゃべりする」であった。図4の2012年では、2003年で「06 公共の場で友人と声を上げて話に盛り上がる」

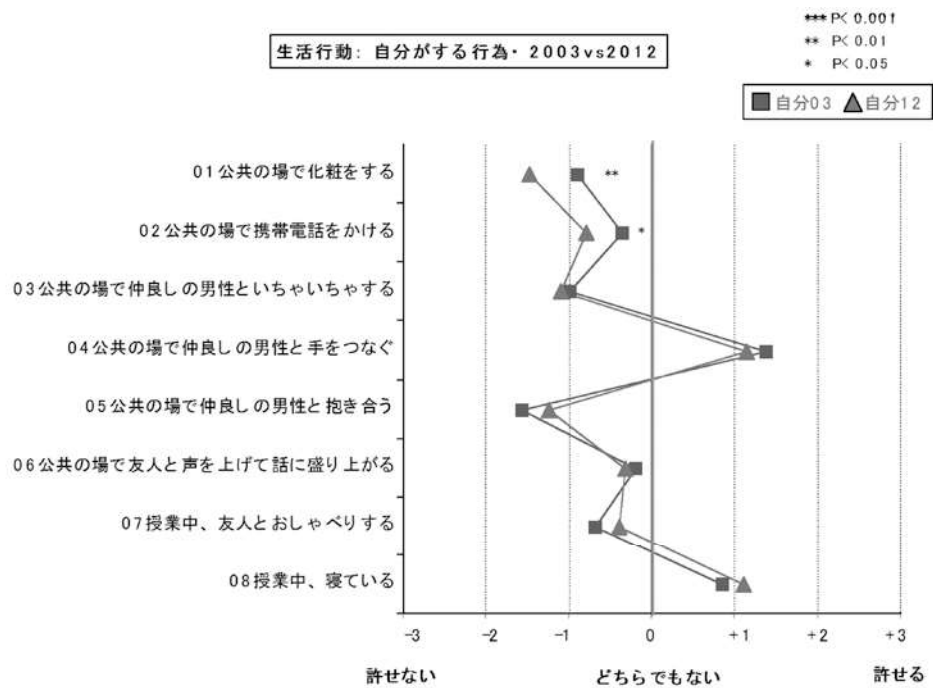


図1 生活行動における自分がする行為・年代比較

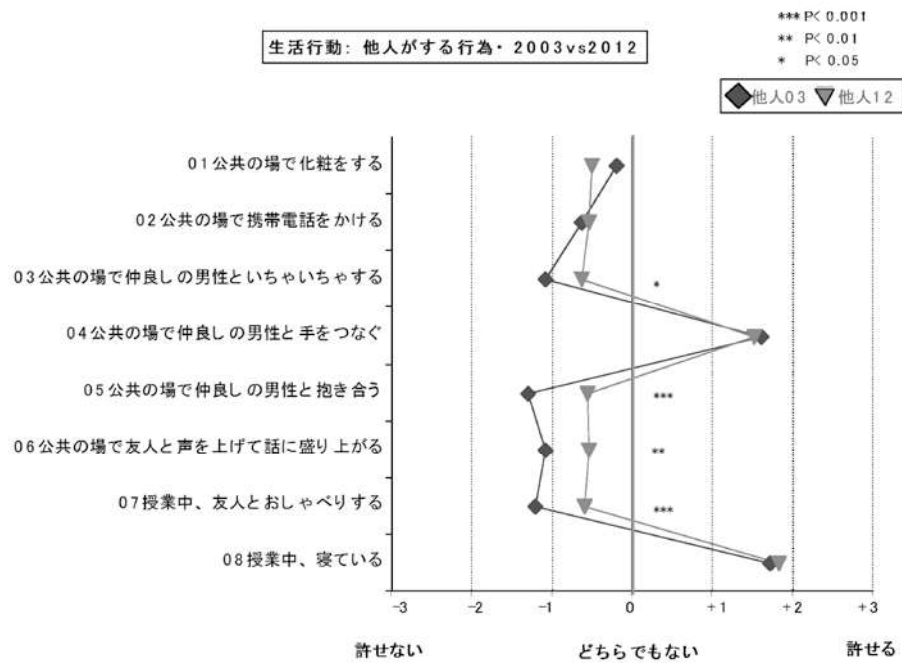


図2 生活行動における他人がする行為・年代比較

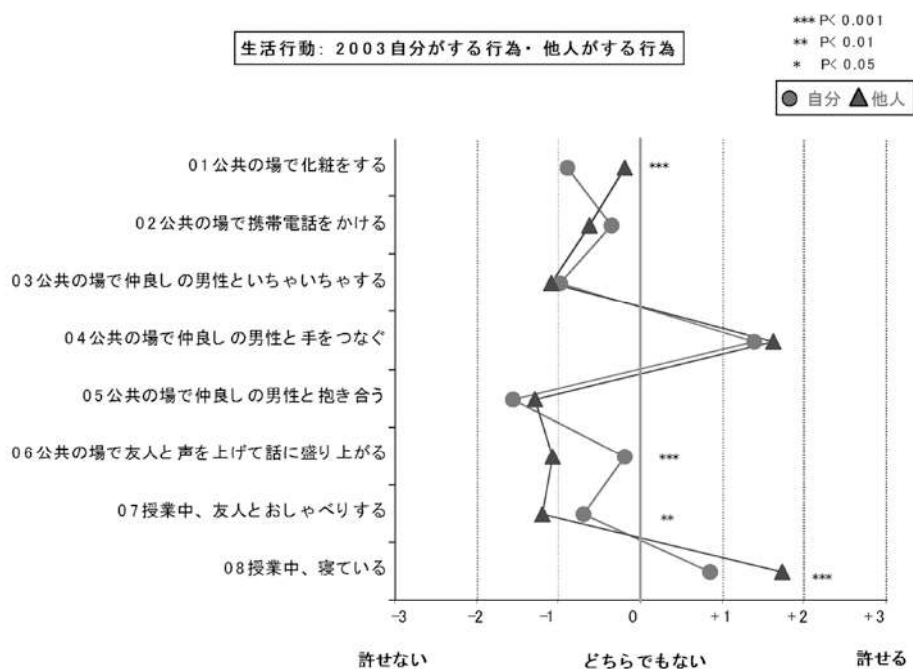


図 3 2003 年生活行動における自己と他者・行為比較

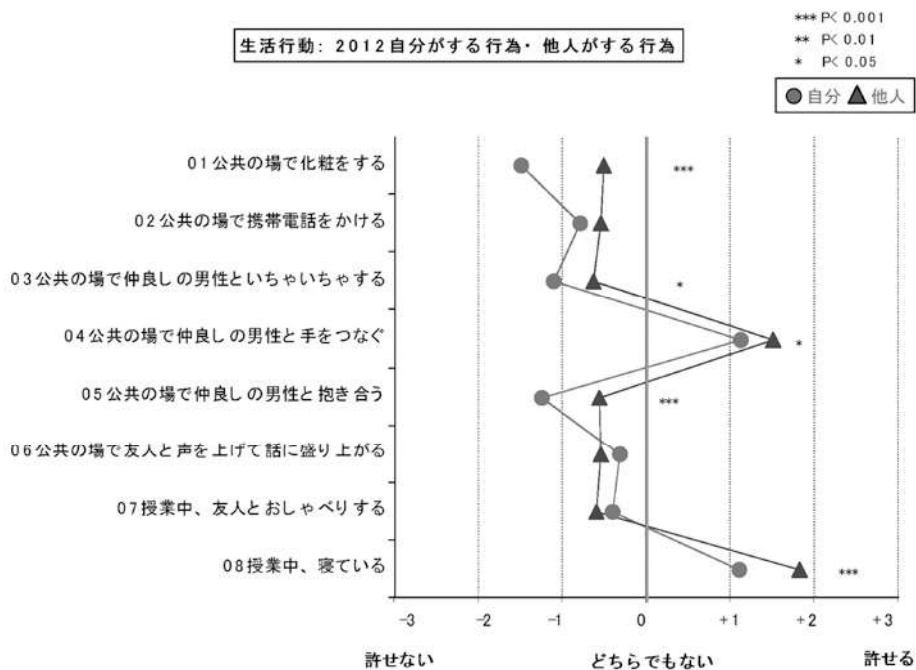


図 4 2012 年生活行動における自己と他者・行為比較

る、「07 授業中、友人とおしゃべりをする」は自分と他人との評価との乖離がなくなっている。

もともと「化粧」や「寝ている」は、静かな行為で直接被害もなく勝手にやってくれて構わない、どうでもよいという感覚なのだと思う。また、「話をする」ことは、2003 年では他人がすることは、耳ざわりで不快だったのが、今は他人も自分と同様のレベルを示すことから、音に関する違和感がないようになったのかと考えられる。

3-2 衣生活行動における許容度

3-2-1 「自己」および「他者」別における年比較

図 5 の「自分がする行為」の年別比較では、「13 高級感のある服を着ている」「15 時代の先端を行くような服を着ている」「16 エレガントな服を着ている」では、両年とも「許せる」側にあり、また「許せない」ものでも 2012 年は全体的にほとんど「許せる」側に移行している。図 6 の「他人がする行為」の年別比較では、全て「許せる」ことであり、2003 年から 2012 年は全体的にさらに「許せる」側に移行している。

3-2-2 年別における「自己」および「他者」の比較

図 7、図 8 に示す年別における「自分がする行為」および「他人がする行為」の比較では、両年ともほぼ同様な傾向を示している。自分のことに関しては羞恥心や自制心が作用しているせいか、許容できる、できないがはっきりしているのに対して、他人のことを全て「許せる」のは、逆に全般に無関心ともいえるのではない。これは、自分に直接降り掛かってくる行動ではないため、何を着ようが、どうでもいい部分があるのだと思われ、益々許す傾向にあることは、より無関心度が増しているとも考えられる。

3-3 人間関係における許容範囲

3-3-1 17 種類の他者に対する評価の傾向

9 項目の行為と服装について、「見られたくない人」から「見られてよい人」の 17 種類の他者に関する評価平均点をもとにまとめたものが図 9、図 10 である。各図とも横軸の中央は「どちらでもない」、右側は「見られてよい」、左側は「見られたくない」となっており、縦軸には 17 種類の他者の評価平均値を点数順に並べた。併せて、各項目の評価の最大値と最小値の差を各図の上方に示している。

その結果、2003 年 2012 年とも総括的にみると評価の特徴が、大きく三つに分別できる。

(1) 評価の最大値と最小値との格差が 0.5 前後

のものである「5 高級感のある服を着ている」「7 時代の先端を行くような服を着ている」「8 エレガントな服を着ている」は、17 種類の他者間の差がほとんどなく、また服装の内容も否定的でなく、どの人にも「見られてよい」となっている。

(2) 評価の格差が 3.0 以上の「2 ダサイと思う服を着ている」「4 安物っぽい服を着ている」「6 時代遅れの服を着ている」「9 化粧をしている姿」は、一部見られてよい人がおり、その他多数は見られたくない人である。その評価格差が大きく分散傾向にあり、他者の種類によってその対応が顕著に異なることがいえる。

(3) 評価格差が 2.0 前後の「1 露出度の多い服を着ている」「3 過激と思う服を着ている」は、他者の種類によって徐々に見られたくない度合いが異なる場合となっている。

3-3-2 評価格差大であった人間関係の序列の特徴

2003 年、2012 年とも前述 (2) の評価格差が 3 以上であったものの中で、「2 ダサイと思う服を着ている」「4 安物っぽい服を着ている」「6 時代遅れの服を着ている」の他者 17 種の序列をみると共通項がみられる。それを図 11 に図化した。

この結果から、見られてよい方から「母親」「父親」があり、次に「全くのアカの他人」「学校の担任・ゼミの先生」「仲の良い女の友達」のグループが続く。これは身内、気心の知れた人で、自分をさらけ出しても問題が少ないと思われる人たちであり、または逆に全くの利害関係のない人も、後に引くことはないためと思われる。

そのあと、「アルバイトや職場の上司」「あまり親しくない友達」「仲の良い男の友達」など、近しい人ではないが知っているグループが続く。さらに「知っている先輩/後輩」、最後に別格の「憧れの男の人」となり、人間関係上、見栄や体裁を重んじる関係性がある人ほど、「見られたくない」位置にすることがわかる。

3-3-3 年により他者の評価序列が変化したものの傾向

前述 (3) の評価格差 2 前後の「1 露出度の多い服を着ている」「3 過激と思う服を着ている」について、年によって評価の位置変化がみられたものを図 12、図 13 にまとめた。一覧の中の評価点が (+) 値のものは「見られてよい」ゾーンで、(-) 値のものは「見られたくない」ゾーンである。

図 12 の「1 露出度の多い服を着ている」では、

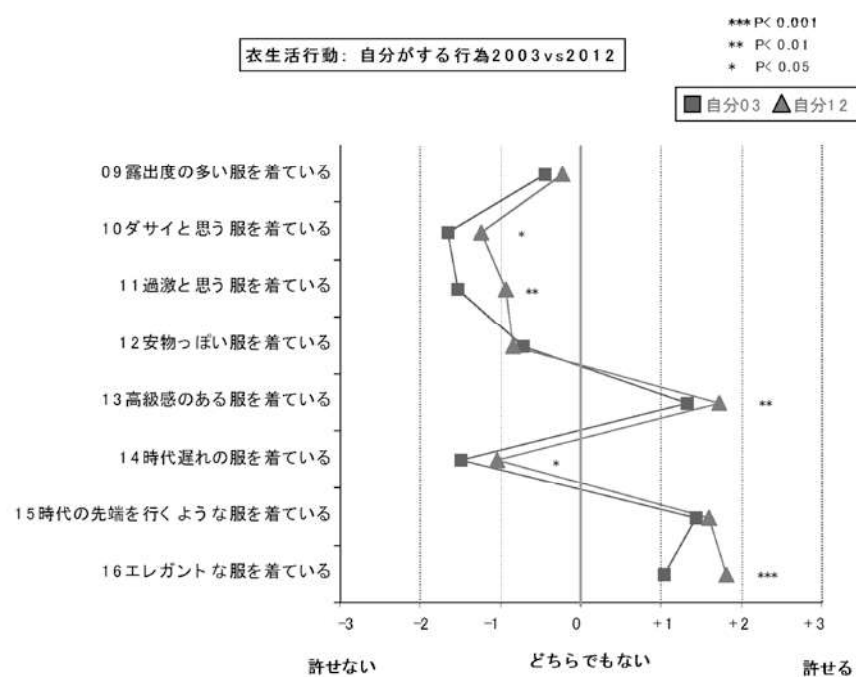


図 5 衣生活行動における自分がする行為・年代比較

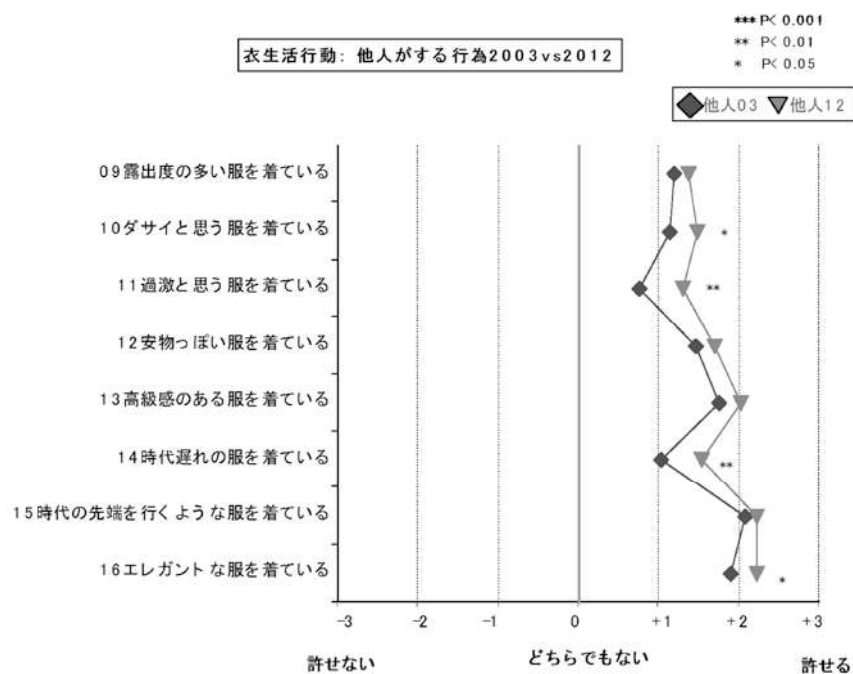


図 6 衣生活行動における他人がする行為・年代比較

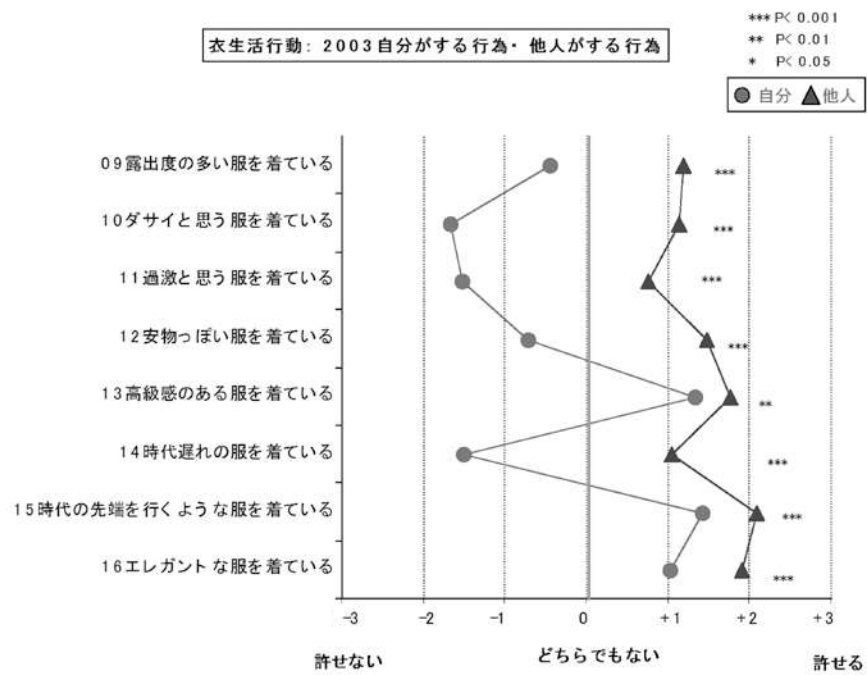


図7 2003年衣生活行動における自己と他者・行為比較

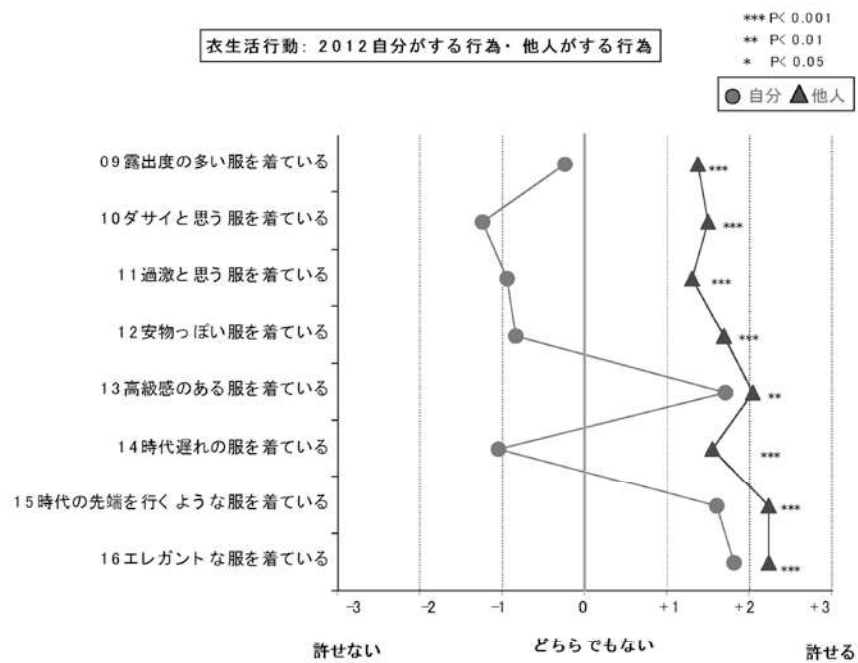


図8 2012年衣生活行動における自己と他者・行為比較

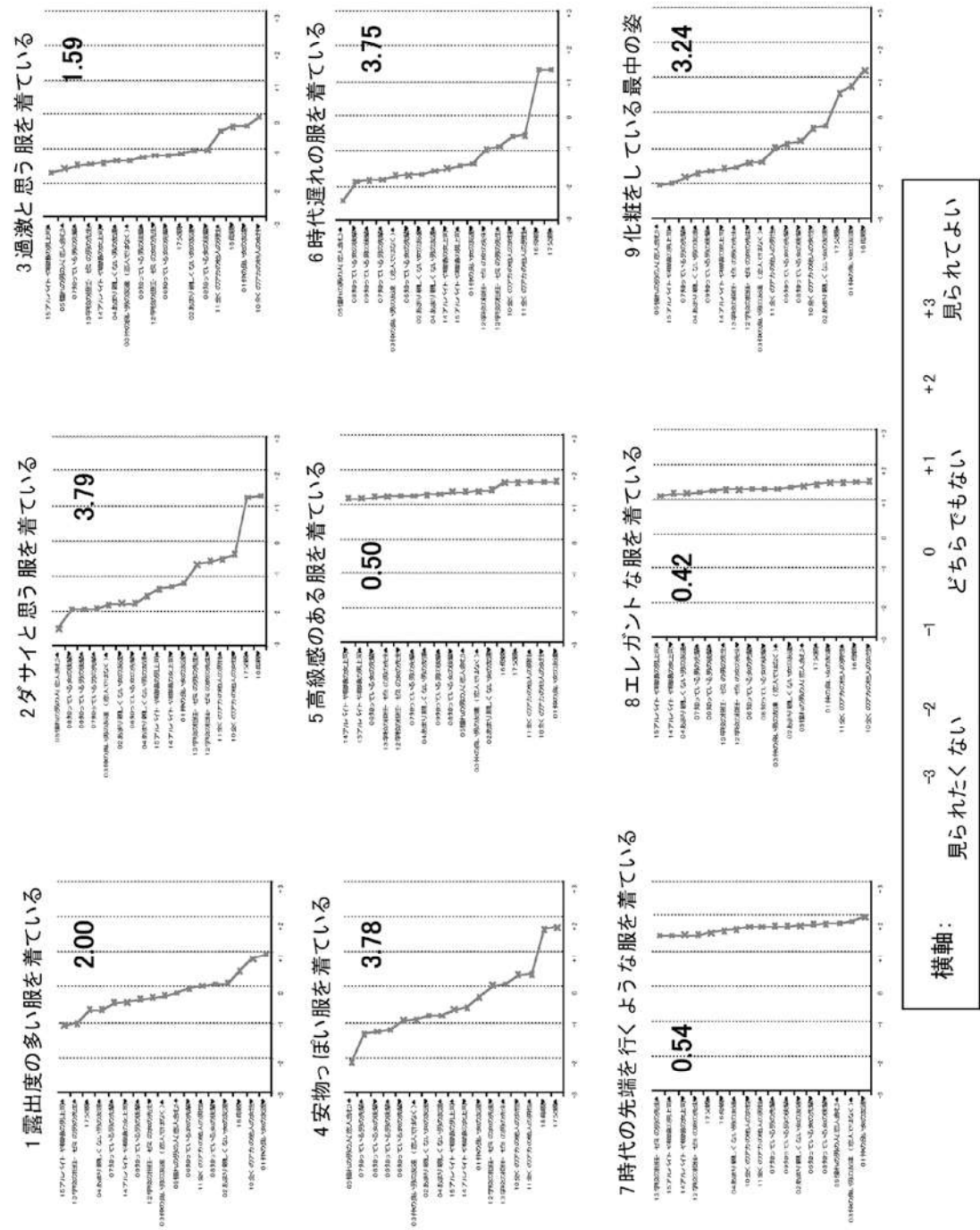


図 9 2003 年・誰に見られてよいかの序列

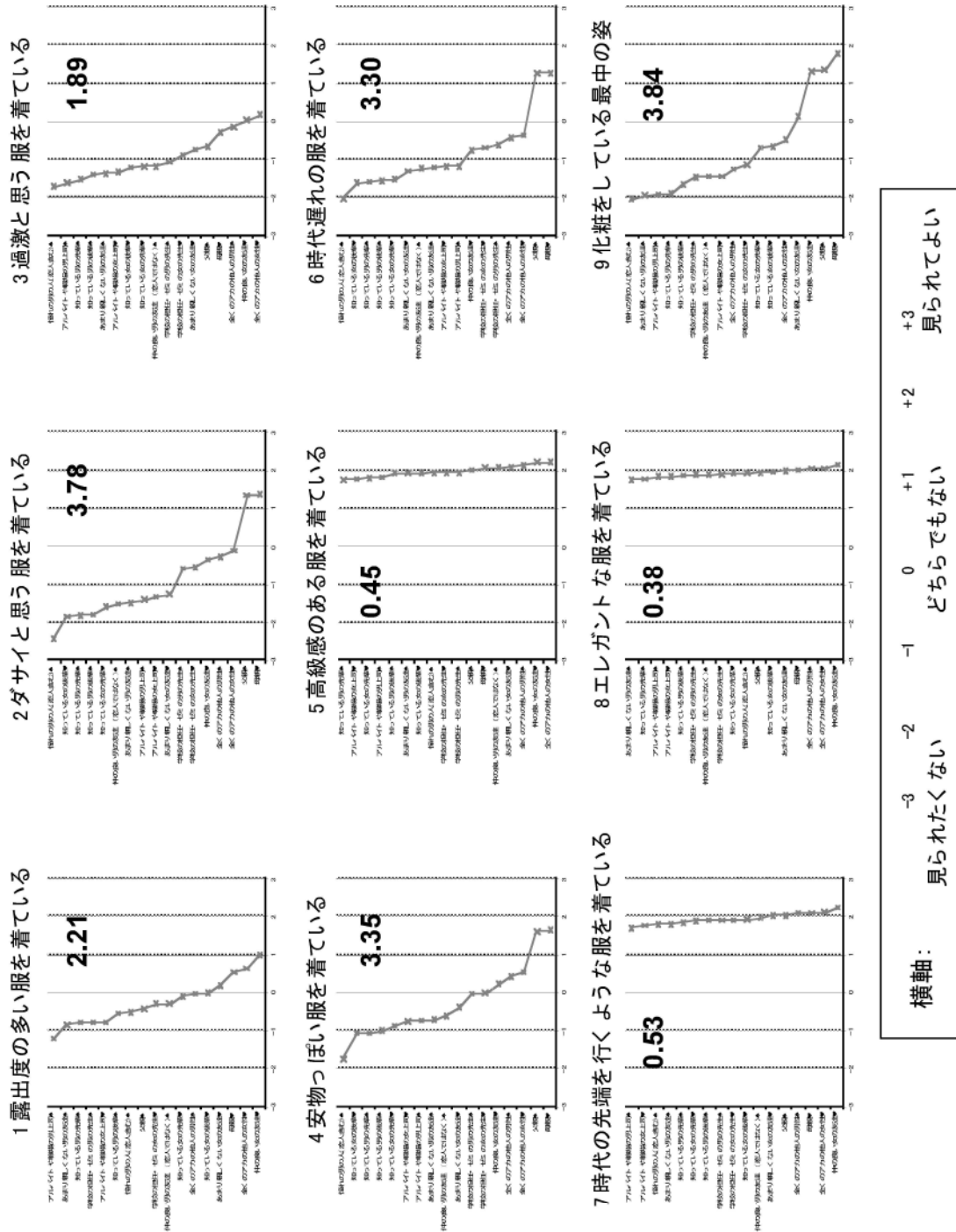


図 10 2012 年・誰に見られてよいかの序列

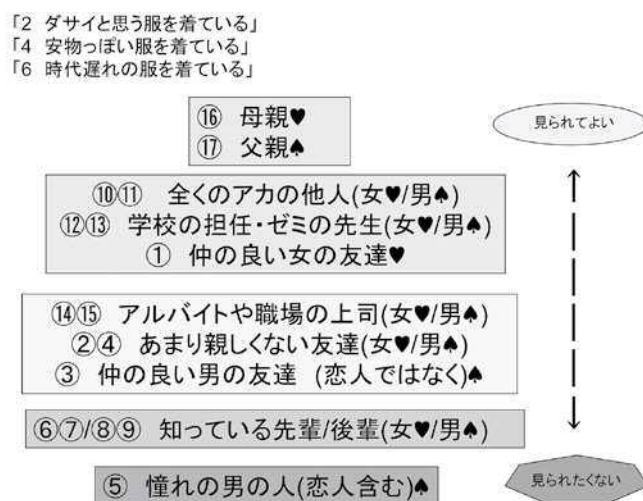


図 11 評価格差大の特徴

「1 露出度の多い服を着ている」

2003	評価点		2012	評価点
01仲の良い女の友達♥	0.90	1 →	01仲の良い女の友達♥	0.97
10全くのアカの他人の女性♥	0.80	2 →	10全くのアカの他人の女性♥	0.62
16母親♥	0.43	3 →	16母親♥	0.51
02あまり親しくない女の友達♥	0.09	4 →	02あまり親しくない女の友達♥	0.18
08知っている女の先輩♥	0.07	5 →	08知っている女の先輩♥	-0.03
11全くのアカの他人の男性♠	0.02	6 →	11全くのアカの他人の男性♠	-0.05
06知っている女の先輩♥	-0.05	7 →	06知っている女の先輩♥	-0.12
05憧れの男の人(恋人含む)♠	-0.18	8 →	03仲の良い男の友達 (恋人ではなく)♠	-0.32
03仲の良い男の友達 (恋人ではなく)♠	-0.26	9 →	12学校の担任・ゼミの女の先生♥	-0.33
12学校の担任・ゼミの女の先生♥	-0.32	10 →	17父親♠	-0.44
09知っている男の先輩♠	-0.35	11 →	05憧れの男の人(恋人含む)♠	-0.53
14アルバイトや職場の女上司♥	-0.45	12 →	09知っている男の先輩♠	-0.57
07知っている男の先輩♠	-0.47	13 →	14アルバイトや職場の女上司♥	-0.8
04あまり親しくない男の友達♠	-0.67	14 →	13学校の担任・ゼミの男の先生♠	-0.8
17父親♠	-0.67	15 →	07知っている男の先輩♠	-0.8
13学校の担任・ゼミの男の先生♠	-1.03	16 →	04あまり親しくない男の友達♠	-0.87
15アルバイトや職場の男上司♠	-1.10	17 →	15アルバイトや職場の男上司♠	-1.24

図 12 他者の評価序列の変化 その1

2003 年から 2012 年にかけてその序列が変わらないものが多数の中、「父親」の「見られたくない」評価が低くなり、一方「憧れの男の人」の「見られたくない」度が強くなった。結果的に両者が近い存在になっている。特に父親への羞恥心や遠慮の気持ちが緩和され、憧れの人には、自分の汚点になりそうな部分はより防御したい思いに変わってきたと考えられる。

また、図 13 の「3 過激と思う服」は基本的にほとんど人には見られたくないが、年による序列が混

沌とし、2003 年から「父親」や「ゼミ・学校の男の先生」の「見られたくない」意識が緩くなり、一方、「知っている後輩（男・女）」には「見られたくない」意識が強くなっており、他者との関係性のあり方に変化がみられた。

3-3-4 他者の序列の総点数化による考察

さらに全体を一括してみるため、17 人別に 9 種類の項目で評価された点数を単純に合算し、年別にそれを高い順から並べたのが表 3 である。2012 年の右欄は 2003 年と 2012 年の差を示したが、全て

「3 過激と思う服を着ている」

2003	評価点		2012	評価点
10 全くのアカの他人の女性♥	-0.09	1 →	1 10 全くのアカの他人の女性♥	0.15
01 仲の良い女の友達♥	-0.34	2 →	2 01 仲の良い女の友達♥	0.01
16 母親♥	-0.35	3 →	3 11 全くのアカの他人の男性♠	-0.16
11 全くのアカの他人の男性♠	-0.49	4 →	4 16 母親♥	-0.31
08 知っている女の後輩♥	-1.03	5 →	5 17 父親♠	-0.68
02 あまり親しくない女の友達♥	-1.03	6 →	6 02 あまり親しくない女の友達♥	-0.75
17 父親♠	-1.14	7 →	7 12 学校の担任・ゼミの女の先生♥	-0.91
06 知っている女の先輩♥	-1.20	8 →	8 13 学校の担任・ゼミの男の先生♠	-1.1
12 学校の担任・ゼミの女の先生♥	-1.20	9 →	9 03 仲の良い男の友達 (恋人ではなく)♠	-1.2
09 知っている男の後輩♠	-1.25	10 →	10 06 知っている女の先輩♥	-1.2
03 仲の良い男の友達 (恋人ではなく)♠	-1.34	11 →	11 08 知っている女の後輩♥	-1.23
04 あまり親しくない男の友達♠	-1.34	12 →	12 14 アルバイトや職場の女上司♥	-1.36
14 アルバイトや職場の女上司♥	-1.40	13 →	13 04 あまり親しくない男の友達♠	-1.39
13 学校の担任・ゼミの男の先生♠	-1.45	14 →	14 09 知っている男の後輩♠	-1.42
07 知っている男の先輩♠	-1.48	15 →	15 07 知っている男の先輩♠	-1.55
05 憧れの男の人(恋人含む)♠	-1.59	16 →	16 15 アルバイトや職場の男上司♠	-1.64
15 アルバイトや職場の男上司♠	-1.69	17 →	17 05 憧れの男の人(恋人含む)♠	-1.74

図 13 他者の評価序列の変化 その2

表 3 序列の点数化

2003 年・9 項目の評価点数合計		2012 年・9 項目の評価点数合計		2003 年との格差
16 母親♥	10.18	16 母親♥	12.24	2.06
17 父親♠	7.56	17 父親♠	10.28	2.72
10 全くのアカの他人の女性♥	4.44	01 仲の良い女の友達♥	7.84	4.32
01 仲の良い女の友達♥	3.52	10 全くのアカの他人の女性♥	6.53	2.10
11 全くのアカの他人の男性♠	2.64	11 全くのアカの他人の男性♠	4.42	1.77
12 学校の担任・ゼミの女の先生♥	-0.46	02 あまり親しくない女の友達♥	2.55	3.65
02 あまり親しくない女の友達♥	-1.10	12 学校の担任・ゼミの女の先生♥	1.95	2.41
13 学校の担任・ゼミの男の先生♠	-1.62	13 学校の担任・ゼミの男の先生♠	0.98	2.60
06 知っている女の先輩♥	-2.33	03 仲の良い男の友達 (恋人ではなく) ♠	-0.54	2.46
08 知っている女の後輩♥	-2.44	06 知っている女の先輩♥	-0.57	1.76
03 仲の良い男の友達 (恋人ではなく) ♠	-2.99	08 知っている女の後輩♥	-0.78	1.66
14 アルバイトや職場の女上司♥	-3.08	14 アルバイトや職場の女上司♥	-1.63	1.45
04 あまり親しくない男の友達♠	-3.66	04 あまり親しくない男の友達♠	-2.25	1.40
09 知っている男の後輩♠	-4.01	09 知っている男の後輩♠	-2.48	1.53
15 アルバイトや職場の男上司♠	-4.54	15 アルバイトや職場の男上司♠	-2.92	1.62
07 知っている男の先輩♠	-4.73	07 知っている男の先輩♠	-3.50	1.23
05 憧れの男の人 (恋人含む) ♠	-6.32	05 憧れの男の人 (恋人含む) ♠	-4.97	1.35

(+) 評価になっており、2012 年は、2003 年より、おしなべて「見られてよい」側に移行していることになる。

ただ、父親は同じ親でも母親よりは見られたくない結果である。また、全体として、全くのアカの他

人は見られても構わないが、「知り合いの男性」は「知り合いの女性」以上に見られたくないことがわかる。

4. 結言

公共の場における生活行動、衣生活行動について、本人が当事者として実行する場合、他人がそれを実行する場合とでの感じ方について、その行動を「許せる」「許せない」という視点から検討を試みた。

生活行動における「許せる」「許せない」の自己と他者の評価傾向は、同じ傾向にあった。しかし、自己より他者を「許せない行為」は、自己に利害がある場合、逆に自己より他者を「許せる行為」は、自分には直接利害関係がない場合であった。衣生活行動では、他者のことはどんな服装でも全て「許せる行為」であり、自己のことは、服種によって「許せる」「許せない」が顕著に分かれ、他者には寛容であるが、自分には線引きがはっきりしている結果となった。換言すると、生活行動や衣生活行動とも、以前よりもさらに「許せる」すなわち「寛容」であり「無関心」ともいえるのではないかと思われる。

さらに、17 種の他者に対して、生活行動の中の化粧行為と、衣生活行動の 8 種類の服装を、他者に「見られてよい」または「見られたくない」については、「見られてよい」服装は人間間での評価の違いはほとんどないが、「見られたくない」は、人間関係の親密度、相手への思い入れ、性別による部分が関わっていた。特に、父親は母親より敬遠される

ところがあるが、服装によっては、母親に近い位置づけとなり、距離感が縮まっているところもある。また、全体としては全くのアカの他人は見られてよいが、知り合いの男性は女性以上に見られたくない結果となった。

以上から、「生活行動」ならびに「他者に見られてもよいかどうか」は、特定の行為、特定の他者について歳月とともに変化が認められ、この時間軸における小さな意識変化の積み重ねが大きな社会的人間関係の変化に繋がるのではないかと考えられる。

今後の課題として、これらの関係性が具体的な「場」の上ではどのように変化するのも、自己と他者の関わり度合いや、人間関係の重みづけについて合わせて検討する必要もあると考えている。

注

- 1) 澤口俊之, 南伸坊: 平然と車内で化粧する脳, 扶桑社, 2000
- 2) 高橋鷹志: シリーズ研究の動向 公共空間の人々の振舞について, 日本家政学会誌, Vol. 62, No. 1, p. 69, 2011
- 3) 平松隆円: 化粧行動許容に関わる公衆場面の構造解明とそれを規定する個人差要因, 繊維製品消費科学会誌 Vol. 47, No. 11, pp. 630-639, 2006
- 4) 鈴木晶夫: 共有使用の許容度から見た人間関係, 早稲田大学人間科学研究, Vol. 13, No. 1, pp. 1-11, 2000